

2019年11月20日(火)天気:爽やかな晴天。ストーブが必要な季節になってきました。

## FURTHER通信 Vol.11

皆さま、いつも大変お世話になっております。FURTHER 代表:佐野です。日頃よりご愛顧いただきまして、誠に有難うございます。さて、今月も張り切って参りましょう！と、本題に移る前に。

先日、友人の結婚式に出席した際に、乗り物通の友人との何気ない会話で「電動キックボード」なる物の存在を聞きました。キックボードは当時私が小学生くらいの時に爆発的なブームが到来し、近所の子どもたちが皆挙って乗り回していたという記憶がありますが、どうやら現代のキックボードとは、それとこれとは似て非なるものとのことです。時速30km以上は当たり前、折りたたみ式で持ち運びが簡単なスクーターに近いものだとのことです。そりやすごい！好奇心に火がついた私は、少し調べてみることにしました。

初めはちょっとした好奇心からでしたが、調べていけばいくほど、電動キックボード業界に取り巻く法規制や、海外事情、地方活性の課題点との密接性等々、なかなかこれは面白いテーマだなということで、今月号のFURTHER通信は「電動アシスト自転車・電動キックボードの未来。ラストワンマイルの大きいなる可能性」というテーマの元、コラムを執筆させていただこうと思います。

思い返せば、人間は交通手段の進化により文明を発達させてきました。船、馬、蒸気機関車、自転車、バイク、車、飛行機と、人類の移動手段は様々な進化を経ており、移動手段の革新と人類の進歩は密接な繋がりがあります。近年では、人工知能(AI)の発展も目覚しく、自動車の自動運転化もよく話題として上がりますが、今回はもっと小さな生活フィールド・狭い活動範囲の中で活躍してくれそうな電動アシスト自転車・電動キックボードに注目してみましょう。

まず、我々の身近な電動式の移動手段として思い浮かぶものは、電動アシスト自転車ではないでしょうか？当時、電動アシスト自転車というものを初めて目の当たりにしたのは、今から約25年前、私がちょうど小学生でした。たしか、近所に電動アシスト自転車を持っている方がいて、乗せてもらった時の感動は今でも覚えています。「すっげー！めっちゃ楽チン！便利な乗り物だなー！大人になった気分！」と感動したのと同時に、見た目の不恰好さと、自力ではなく機械にアシストされていてるという、一種の「軟弱感」を感じたことを記憶しています。例えるならば、「いくら寒くとも、男がモモヒキを履いたら負けだ！」みたいな感覚でしょうか？わかりにくいでしかね。まあ、それに近い感情があったことは覚えています。

電動アシスト自転車について調べてみると、日本において電動アシスト自転車が市場に出回ったのは1994年に発売されたYAMAHA社製のPASという自転車からでした。そうそう、確か私の初体験の相手もこちらのPASでしたね。

1994年4月1日に全国販売を開始したYAMAHAのPASは発売当初、149,000円で販売され、重量は31kg、充電時間10時間、走行可能距離は20km。20kmといいますと、大体富士宮駅から朝霧ジャンボリークラブ辺りまで。時代はあれから25年経ちましたが、最新モデルのPASは、どのくらい進化したかといいますと、販売価格は118,800円と約3万円程度安くなり、重量は26kg、充電時間は3.5時間、走行可能距離は56kmと大幅に進歩していることがわかります。富士宮駅から朝霧ジャンボリークラブまで行って帰ってこれるという距離になります。そう考えると、相当な距離です。



だいぶコンパクトかつ、スタイリッシュになりました。

電動アシスト自転車は、2007年から2017年の間の売り上げが、2.4倍(※1)になるなど、日本の高齢化が進んでいるのと比例して需要は増しています。近年の東部地区におけるスポーツジムの増加も同じ流れなのかな、と、個人的にはそう感じています。(※1:経済産業省生産動態統計による。)

電動アシスト自転車と電動キックボードの1番の違いは、公道において免許無しで乗れるのか・乗れないのか。という点です。電動アシスト自転車は公道での運転規制はありませんが、電動キックボードは現状の日本の法規制だと原付免許がないと乗ることができない。というのが現状です。

少し世界に目を向けてみると、カーシェアリングやライドシェア、自転車のシェア等々、近年様々な「新しいタイプの移動形態」が誕生してきましたが、そんな中でも特に電動キックボードのシェアは海外においてどんどん拡大し続けているようです。

米国や中国、欧州などでは、市街地の移動手段として電動キックボードが普及拡大をし続けています。フランスのパリやドイツのベルリンなどでは、街の至るところに電動キックボードが設置されているよう、スマホでQRコードを読み取るだけで利用が可能というのが現在の海外のキックボード事情であり、「ラストワンマイル」(※2)の改善に大いに貢献していると聞きます。加えて、行政が導入しやすい要素も満点で、まず乗り物としての単価が安い(5万円程度)ということ、また、自転車と同じくらい早い(時速24km)ということ、老若男女幅広い世代が操作可能である(足腰が悪くても立ち乗りが可能)ということが挙げられますが、なにより1番の普及拡大の理由は、日本のように「堅苦しい法規制が無い。」ということではないでしょうか。セグウェイも法規制の問題上、日本では見かけませんが海外では相当数が走り回っていると聞きます。日本は新しい物・流れに対してはとってもお堅い国なのです。(※2ラストワンマイル:ここでいうラストワンマイルとは基地局となる駅・バス停等からの狭い範囲での行動範囲のことを指す。)

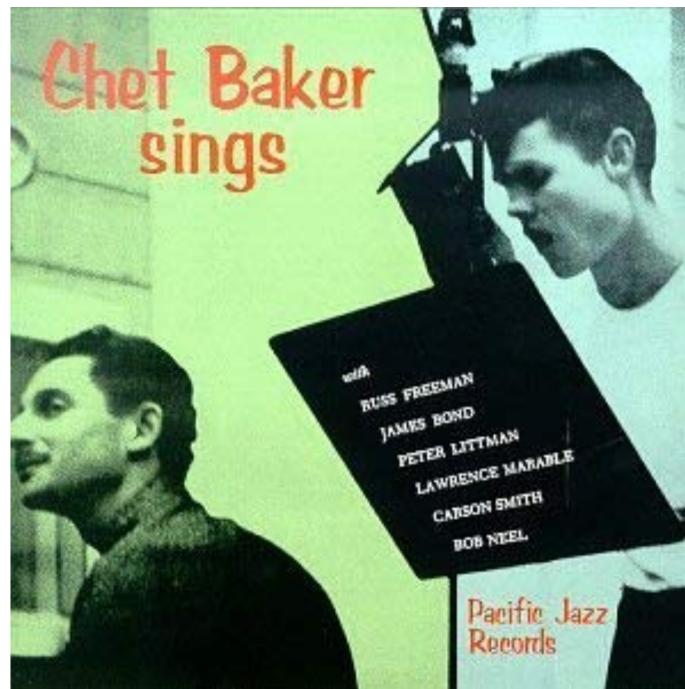
富士市や富士宮市のような地方においても、もっと手軽に移動ができる手段が普及すれば地方活性に一石を投じることは間違いありません。2020年にはオリンピック開催国となる日本ですが、これから益々インバウンドが増えていきます。海外の方々に地方の魅力を深く知っていただくためにも、このようなラストワンマイル問題は、今後の課題点の一つなのだと思います。

なーんて、日本の法規制を嘆いてもしようがない！電動キックボードは法規制が必要であり、今後の動向に期待するしか無い。ということはよく分かりました。しかし、それで終わりでは面白くないですよね。今の日本の法規制の中で、法に触れることなく公道で走ることができて、誰でも簡単に導入できそうなものはないのでしょうか。調べてみました。

近年ではバッテリーを積んでいなくても、容易く走ることができるアシストギア「FREE POWER」なるものも発売されているようで、構造は画期的です。簡単に説明すると、ギア部分に内蔵されたシリコンの反発力をを利用して推進力に変換する。という製品なのですが、要は発進時にペダルを踏みこむ際ギア内のシリコンが内部で圧迫されます。ペダルが上に上がる時に圧迫されていたシリコンが元に戻ろうとする力を利用し、それを推進力として利用するというのがこの製品の肝。電気の力を使わずしてシリコンの反発力・形状記憶力を利用した製品なのですが、動画で見る限り、画期的な製品で大変魅力を感じました。現在こちらの製品は販売元の株式会社オリンピックさんが店舗展開している、東京・埼玉・神奈川・千葉・群馬の店舗でしか購入はできないとのことですが、気になる方は是非Webで調べてみてください。

また、既存の自転車に後付けで電動アシスト機能が追加できる、「bimoz」というイスラエルの電動アシスト機能製品(あくまでこちらは電動機能ではなく、アシスト機能としての位置付けなので、無免許で公道でも走行可能)が昨年クラウドファンディングで話題になり、予想以上の人気を博したことなのですが、残念ながら現時点では公募は終了しており、日本では購入することは不可能な模様。しかし、海外のクラウドファンディング「Indiegogo」では、現在も販売中のようでした。気になるお値段は日本円にして1台約100,000円から。自分の好きな自転車に後付けできて、見た目も非常にコンパクトかつスタイリッシュな「bimoz」。これには、久しぶりに心踊らされました。要チェックです。

【今月のピックアップアルバム】  
**Chet Baker** : Chet Baker Sings (1956)



寒いですね。もうすぐクリスマスですって。寒くなると、コーヒーとJazzめいてくるのは、きっと私だけではないはず。

今回紹介するのはアメリカのトランペット奏者でもあり、素晴らしいシンガーでもある、Chet Baker(ちえつと べいかー)の1956年に発売されたアルバム「Chet Baker Sings」です。

アルバムのタイトルの通り、トランペット奏者でもある彼自身で往年のJazzナンバーにメロディーと歌詞を付けて歌っているアルバム。彼の唯一無二の甘く憂いを帯びた声質、シンプルなアレンジ、程良く心地よい脱力感。どこを切り取っても素晴らしいアルバムです。私が無人島に持っていくアルバム20枚に、確実にランクインするアルバムです。(表現が古い！)

今年の冬のお供には是非こちらの一枚をお勧めいたします。どんな人もきっと彼の魔法にかかるはずですよ。

以上、今月のFURTHER通信でした！次回もお楽しみに！